

J E C の源流と歴史的遺産 8

敬虔主義の遺産と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

敬虔主義の遺産と J E C

前回は、17世紀に登場した正統主義神学との連続性をもつ J E C の神学についてみました。今回は、敬虔主義の遺産と J E C の関係を考えてみましょう。

敬虔主義運動の特色的な遺産¹

日本のキリスト教が、敬虔主義的、信仰復興運動的性格をもつものであることは、歴史的に自明の事実です。主だった敬虔主義運動には、ヨーロッパ大陸のルター派・改革派内における霊的刷新運動：シュペーター、ツインゼンドルフ、ハレスピー、ブルムハルト父子、ピューリタニズム：バンヤン、パーキンス、エイムズ、近代の福音的信仰覚醒運動：エドワーズ、ケアリ、スポルジョン、ムーディ、ミューラー、19世紀以降の聖霊派運動：フィニー、マーレー、シンプソン、マイヤー、トーレー、ニー等があげられます。これらの人々の名前のうちの幾つかは耳にしたことがあるのではないのでしょうか。私も信仰生活の初期にそれらの信仰良書を薦められてよく読み、深く感動させられたものでした。敬虔主義運動における特色的な遺産とは、**頭だけの信仰**ではなく、人間の全存在の中心である**心でしっかりと受けとめられた信仰**ということであり、聞いた真理は生活とならなければならない、正しい教理“orthodoxy”は正しい生活実践“orthopraxis”を伴わなければならない、ということでした。上記の人々のすべてを取り上げることはできませんので、ここでは J E C に直接関係のある運動、人物、著作を取り上げて分析・評価していきたいと思えます。

ウォッチマン・ニーの「キリスト者の標準」²

私たちが洗礼を受けましたときに、教会からいただきました受洗記念のプレゼントはウォッチマン・ニーの「**キリスト者の標準**」でした。それは、J E C の福音理解（私たちがクリスチャン生活との関わりの中で、十字架の恵みと聖霊の働きをどのように理解しているのか）を簡潔明瞭に表現したものでした。ある集会で、おそらく J E C 伝道師セミナーであったと思いますが、J E C 古参の先生が「『キリスト者の標準』を読んだことのない人は、J E C の教職者と認めたくありません。」と語られるほどでした。その頃は、スウェーデン・オレプロミッションの宣教師たちによって形成された諸教会が「日本福音教会」として自立していく時期で、そのアイデンティティが明確にされていっていた時期でした。そのような時期において、ある種の“ウォッチマン・ニー”ブームというものがあり、彼の著作を読むことが薦められ、私

たちは大いに読みました。本棚には和書・洋書50数冊のウォッチマン・ニーの書籍が並び、辞書を片手に読んだものでした。しかし、後に、日本各地そして世界各地で、ウォッチマン・ニーの主要な後継者であるウィットネス・リーの「ローカル・チャーチ」運動が異端として大きな問題になってきました。それとともに、ウォッチマン・ニーの名前にも傷がつくかたちで、JECの中における「ウォッチマン・ニー」ブームも下火になっていきました。小さな神学者としての私の心の中には「あのときのブームは何であったのか、そして下火になったのはどこに原因があったのか。このような状況下で、JECはどのようにして十字架と聖霊のメッセージを継承していくのか。

」と、あの出来事を神学的にきちんと分析し評価しておくことに重荷がありました。共立基督教研究所での学びの目的の一つがここにありました。

ウォッチマン・ニーとその著作の評価

歴史神学と組織神学の視点からみますと、ウォッチマン・ニーの著作集は「**玉石混交**」であると言えます。紙面の関係で神学的に細かい説明はできませんが、**出版社によって見分ける**方法は有効です。いのちのことば社や生ける水の川やCLCからの出版は健全です。しかし、「**日本福音書房**」はウィットネス・リーが指導している「**ローカル・チャーチ**」という**異端の出版社**であり読むべきではありません。ローカル・チャーチの異端性につきましては、以前JECニュースでの連載されたものがありますので、JEC本部の吉野先生にお問い合わせください。ウォッチマン・ニーの50数冊あります著作の中にも「**石ころ**(問題となる教え)」が含まれています。では、何が「**玉**(健全な教え)」なのでしょう。それは、ダナ・ロバーツ師が「ウォッチマン・ニーを理解することⁱⁱⁱ」という研究書で明らかにしていますように、宗教改革の遺産を体系化した**正統主義神学**の「**正統的实践**」を目指した敬虔主義運動の流れとしての「**ケズィック運動**」の**メッセージを芸術的手腕をもって整理した**という点に彼の卓越した貢献があります。彼には優れた文筆の才能がありました。逆に、彼の「人間論」「教会論」「終末論」には幾つかの問題とされる教えが指摘されています。

「敬虔主義運動の遺産」を継承・深化・発展させる群れとしてのJEC

ケズィック聖会といえますのは、英国のリゾート地のケズィックで「**クリスチャンの実践的聖潔**」を主要テーマに毎年開催されています超教派の聖会のことです。そのメッセージの特徴のひとつに「**漸進的聖化**」と「**危機的聖化**」のバランスと調和があります。JECが宣教師を通しての「**聖化のパバテスト理解**(新生したクリスチャンは、幼児が成長して成人と

なっていくように、次第に霊的に成長していくという漸進的理解)„と第一世代の教職者が学ばれました塩屋の神学校を通しての**“聖めの経験**(救われているが自己中心で肉的な生活から、「毛虫が蝶に変貌する」ように、クリスチャン生活における明確なある時点において危機的経験を通して聖められるという理解)„という、**危機と漸進の調和**の中で聖化を理解しているのと類似しています。ロバーツ師は「ウォッチマン・ニーの『キリスト者の標準』『キリスト者の行程』は**ケズィックの教え**の整理である。」と記述しています。実際に「キリスト者の標準」の内容は、「キリストの血：**義認**」「キリストの十字架：**聖化**」の大枠をもって始められ、**聖化のプロセス**(進歩の行程)の解説として、“知る”こと、“認める”こと、“自己を神にささげる”こと、“御霊による歩み”、“十字架を負う”こと、という五つのステップから構成されています。ケズィック聖会の構成はといいますと、第一日は“罪”の問題が扱われ、深い罪の自覚と**“身代わりとなられたキリスト”**が説かれます。第二日はパウロ神学の核心である**“キリストとともに十字架につけられた”**ことが説かれます。第三日目は人々の失敗と無能にも関わらず神の全き備えの中で無条件の**“献身”**がチャレンジされます。(義認と聖化のプロセス経ずして献身のチャレンジなし、つまり**“No crisis before Wednesday”**と言われます。)第四日目は**“御霊にある生活”**が説かれ、聖霊に満たされ、支配され、従順に生きることが勧められます。元々は以上の四つが主要テーマでしたが、後に神に仕え、隣人に仕える**“奉仕・宣教”**が第五のテーマとして加えられていきました^{iv}。私がここで教えられますのは、JECがその**福音理解の核心**として保持してきた**“十字架と聖霊”**理解は、ウォッチマン・ニーの流れのものではなく、ケズィック運動に流れていたものであり、ひいては「使徒的信仰 古代教会の正統教理 宗教改革の原理 正統主義神学」の正統的实践としての**“敬虔主義運動の遺産”**であるということなのです。このような視点にたつときに、私たちJECは「ウォッチマン・ニー ウィットネス・リーの流れ」の悪しき影響から解放されて、健全な「敬虔主義運動の遺産」を継承・深化・発展させる群れとして**歴史的かつ神学的に正しいポジション**を獲得することができるのです。

ⁱ 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.108-118

ⁱⁱ ウォッチマン・ニー「キリスト者の標準」いのちのことば社

ⁱⁱⁱ Dana Roberts “Understanding Watchman Nee,” Haven Books,1980, pp.50-51

^{iv} “Five Views on Sanctification,” J.Robertson McQuilkin ‘Keswick View’,1987,pp.152-156